

劇団あおきりみかん 其の参拾四

『パラドックス・ジャーニー』

作・鹿目由紀

女
7

女
6

女
5

女
4

女
3

女
2

女
1

男
4

男
3

男
2

男
1

登場人物

男1と女1が向かい合わせに立っている。

男1

俺は、いまこうして息をしている。冷たいものを触れば冷たいと感じるし、ずっと食べていなければお腹がすく。それはごくごく当たり前のことだ。だが、はたしてそうなのか。俺はいま、本当にこの場所で息をしているのか。冷たいものを冷たいと感じ、お腹がすいているのか。もしかしたら俺はどこかで頭を輪切りにされ、脳をむき出しにされ、そのように感じる刺激を与えられているだけなんじゃないか。そう思い始めたらもう、そうだとしか思えなくなってきたんだよ。

女1

つまりあなたは、今こうして私の前にいることも怪しいと言うのね。

男1

ああそうだ。そもそも俺がいきなり見知らぬ女性にこのように長く堅苦しい台詞をぶつけるのは不自然じゃないかな。

女1

そうね。私たちはまだ会って40秒しか経っていないものね。

男1

そうだろう。それなのに俺は、今現在俺がもつとも気になるもつとも深い疑問についての話を、見知らぬ女性である君にいきなり投げかけたんだよ。しかもこのように、いきなりタメ口だ。俺ほど丁寧かつ他人との距離を重んじる人間はいないのに、会ってすぐにタメ口なんて、これはなにか大きな力に操作されているとしか思えないよ。

女1

そうかもしれないわね。

男1

この世界はさ、疑い始めたらキリがないよ。なにが正しくてなにが間違っているか、それを決めるのはとても難しい作業だ。

女1

そうね。だけど私は決められるわよ。どうして。

男1

私、実はパラドックスの向こう側に住んでいるのよ。

女1

パラドックスの向こう側？

男1

そう。パラドックス、つまり逆説、あるいは矛盾の向こう側。仮説のいない国。それが私の故郷なの。

女1

矛盾の向こう側？なに言ってるんだ。そんな場所あるわけがない。

男1

あなたはこっち側の人間だからそう思うのよ。けれどパラドックスの向こう側の人間からしてみたら、そういった世界に対する疑いは、もはや化石のように古びてしまったものなのよ。

女1

じゃ俺をその向こう側に連れて行ってくれ。

男1

あなたを？

女1

俺はパラドックスだらけの世の中から抜け出したい。

男1

いいわ。だったらまず、

女1

まず？

女1

パラドックスだらけの世の中から抜け出すために、目の前のパラドックスだらけの世の中を無くしてください。

男1

なに言ってる。俺はパラドックスだらけの世の中から抜け出したいと言ってるんだ。その前にまずパラドックスだらけの世の中を無くしなさいなんて、もし俺の努力によってパラドックスが解消されるなら、俺はここから抜け出す必要がないじゃないか。

女1

そうね。それこそがパラドックスよね。

男1

そうだよ！

女1

だからあなたは抜けられないわよ。死んでもね。

男1

抜けられない？パラドックスから？

男2がはっと起き上がる。

と同時に、男1と女1の姿はない。

男2の傍らに、男3と女2がいる。

男2

というビジョンが見えるんだよ。

男3

それは夢なのか。

男2

夢なのかも分からない。寝ている時に見るわけじゃなくて、ふと頭をよぎるもんだから。

男3

なるほどね。

男2

どう思う？

男3

どう思う？ってどういうことだよ。

男2

どっちが現実なんだろうな。

女2

どっちがっていうのは、今この瞬間と、あなたが見ているそのビジョンと、

男2

どっちが現実なのか、ということ？

男2

ああそうだ。

女2

だけど、あなたはそのビジョンの男と同じ顔ではないわけでしょう。

男2

ああ。だけど分かるんだ。あれは紛れもなく俺だ。だって俺はあいつの体から言葉を発してたんだからな。もちろんここにいる俺も俺なんだが。

男3

現実がどっちか。疑い始めたらキリがないな。

男2

あるいはどっちも夢で、現実はさらに他にあるのか。

女2

演繹法（えんえきほう）で考えてみましょうよ。

男2

むしろ帰納法（きのうほう）だろう。

男3

なんだよそれ。

女2

知らない？演繹と帰納。

男3

エンゲキトキボウ？演劇に未来はあるかってそういうこと？

女2 そんな討論したくもない。演繹と帰納。

男2 知ってるよ。すべてのカラスは黒い、だろ。

女2 そう、ヘンペルのカラスね。

男3 なんだよそれ。

女2 演繹っていうのはね、与えられた事実から結論を論理的に引き出す道のことなの。

人がわらわらと出てくる。

女2 すべての人は死ぬ。

人々 うっ。(死ぬ)

女2 ソクラテスは人である。

ソクラテス (人というカードを下げて出てくる) はい。

女2 ゆえにソクラテスは死ぬ。

ソクラテス うっ。(死ぬ)

みんななくなる。

女2 前提があつて、それによって結論を出す方法。これが演繹法。で、帰納法っていうのは…

カラスが通る。

女2 あのカラスは黒い。

カラスが通る。

女2 あのカラスも黒い。

カラスが通る。

女2 あのカラスも黒い。

カラスが集まってくる。

女2 ゆえに、すべてのカラスは黒い。

みんないなくなる。

女2 とまあ、こういうわけ。
男3 なるほど逆ってことか。

男2 いや、あながち逆という言葉では片づけられないんだけどね。
男3 そうなんだ。

男2 演繹でどうやって考えてみるって言うんだ。
女2 いや帰納でしょ。シャーロック・ホームズの推理はほとんどが帰納法だも
男3 ん。

男3 確かにホームズは状況証拠の羅列から真実に辿り着く。

男2 つまり。俺はこちらが現実だと思う。あんたも…

女2 こちらが現実だと思う。

男2 君も？

男3 こっちが現実だ。

男2 ゆえに、こちらが現実だ。そういうことか。

女2 ダメダメ、それは成り立たない。

男2 だよな。ヘンペルのカラスと一緒だ。調べたカラスがみんな黒いからと言
って、世の中に白いカラスがいらないとは限らない。

男3 確かなものはどこにあるのかな。

女2 確かなものなんてどこにもないの。

男3 今ここに生きていることすら不確かなのか。

男2 不確かだろう。俺たちが今見ている俺たちはただの映像かもしれない。

女2 だったらなにを基準にして生きていけばいいんだ。

男3 基準なんて人間が安心するために無理やり作ったヨリドコロでしかないの。

女2 じゃあ、どこもかしこもヨリドコロだらけだ。

男3 俺はあの俺が誰なのか知りたい。

女2 あっちの世界のあなたが？

男2 ああ、それを突き止めるだけでいいんだ。他のことは全て曖昧でもいい。

女2 あっちの世界のあなたにはどうやってたら会えるの？

男2 分からない。いきなりあっちにシフトするんだ。そして、こっちでこうし
て行われたことがすべて、あっちの俺が見ていた夢や幻のように感じる。

男3 その瞬間がいつ来るかは分からない。

男3 内緒にしてただけどさ。

男2 なんだ。

男3 実は俺にも同じことがあるんだ。

男2

え！お前にもお前を見ているお前がいるのか。

男3

そうなんだよ。時々、俺はあいつの夢でしかないと思うよ。

女2

実は私も。

男2

あんたも？あんた医者だろ？

女2

医者だって誰が決めたの。

男2

演繹言うなら、白衣を着ている人は医者だ。つまりあんたは医者だ。

女2

博士の可能性もあるでしょ。

男3

医者のコスプレの可能性もある。

女2

もっとほかの可能性もね。

男3

なんて不確実なんだ。なにも信じられない。

女2

でもね、この謎を解く可能性があるとするとするなら。

男2

するなら？

女2

もうひとりのあなたと一緒にいた女が、もうひとりの私とも一緒にいたの。

男2

パラドックスの向こう側から来た女か。

男3

その女、もうひとりの俺ともいた。

男2

じゃ帰納法で言うのと、そいつは常にもうひとりの世界にいるんだな。

女2

帰納法はあくまで不確実だけどね。それにその女の様子は話で聞いただけ

男2

だから顔が同じかは分からないし。ただ私の女もはっきりこう言ってたの。

男3

私はパラドックスの向こう側から来たって。

男2

もうひとりの俺と一緒にいた女も言っていた。

女2

帰納法で考えると、パラドックスの向こう側はあるわけだ。

男3

それも確かじゃないけどね。

女2

そんなこと言ったらなにもできないよ。

男2

まあね。

男2

とりあえずそこを目指そう！そこには確実ななにかがあるはずだ！

男1と女1に切り替わる。

男1

というビジョンを見るんだよ。

女1

もうひとりのあなたはパラドックスの向こう側を目指して旅に出たのです

男1

ね。

女1

ああ。俺が誰なのかを知るためにね。

男1

あなたも目指しますか。

女1

そりゃこのもやもやが無くなるのなら。

男1

いいでしょう。それじゃ、案内しましょう。

男1

ありがたい。君は道を知ってるんだろう。

女1 ええ、知ってますとも。

女3 が現れる。

女3 そいつは嘘つきです。
男1 え？

女3 女はみんな嘘つきです。だからそいつは嘘つきです。
女1 ちよっと待ってよ。

女3 なんですか。

女1 女はみんな嘘つきっていうなら、あんたも女じゃない。

男1 え、よく分かんない。女はみんな嘘つきだとするなら、彼女は嘘つきだけ
どあなたも嘘つきで、そのあなたがこの人は嘘つきだと言ってるってこと
は…え？どういうこと？

女1 惑わされなくてください。

男1 いや、わけ分かんない。

女1 じゃ、あなたは、私が女であると確信できますか？

男1 え！女じゃないの！？

女1 この方の言う「女」の定義がはっきりしない以上、私は女じゃありません。

女3 屁理屈はなほだしいね。

男1 え、なに、なにを信じたらいいの。

女3 この人の言うことは信じちゃいけません。

男1 でもあんたも女だから、ダメだ。うわーーーーっ！

男1 が走り去る。

男2 たちに切り替わる。

男2 というビジョンだ。

女2 いきなりのパラドックスね。

男3 え、俺全然分かんないや。

男2 なんてあんな女が出てきたんだ。

女2 さあね。もう一人のあなたのいる場所がどこかも分からないし。

男3 だいたいさ、女がみんな嘘つきだと言うなら、男もみんな嘘つきだと思う
けどなあ。

女2 そうなると、全ての人間は嘘つきということになる。

男2 全ての人間が嘘つきだというのは、全ての人間が嘘つきじゃないというこ
となのかもしれない。

男3 ダメだ、頭痛くなってきた。はやいとこ旅に出よう。
男2 旅？なんで旅なんだ。
男3 だってさ、天竺を屈指みたいなんだろう。そのパラドックスの向こう
側を探すっていうのは。
男2 旅なのだろうか。これは。
男3 分かんないけどさ。その向こう側っていうのが、ここでないことは確かだ
よ。
女2 いや、巡り巡ってここかもしれない可能性はあるよ。
男2 ちよっと待て。根本的な疑問をぶつけていいか。
女2 どうぞ。
男2 俺たち：どんな関係なんだ。

間。

男3 そういえば、知らない。
男2 仲間であることは確かだよな。
女2 それは分からないでしょ。
男2 仲間じゃないのに、顔突き合わせて考えていたのか。
男3 仲間ってことにすればいいだろ。
女2 私に関して補足。私は知らない間に白衣を着ていたの。
男2 あんたは、どうしてそんな派手な格好してるんだ。
男3 さあ、俺も気づいた時にはこの格好だったからさ。
男2 そもそも俺の名前はなんだ。
男3 俺に聞くなよ。
女2 私、エマニユエル。
男2 え、外国の人なの！？
女2 この白衣のポケットに名札が入ってたから。
男3 めっちゃ日本人の顔でしょ。
女2 うるさいよ。
男2 百歩ゆずって中国とか韓国なら分かるけど。
女2 名札にはそう書いてあったの。この白衣が違う人のものなら違うでしょう
けど。
男2 いや、世の中不確かなものばかりなら、あんたがその名前でも、むしろあ
んたがエマニユエル夫人でもおかしくないか。
女2 いや夫人ではないよ。
男3 じゃ俺のことは、アルバートと呼んでくれ。

男2 なぜ。
男3 だってこの人がエマニュエルなんだよ。あんたは。
男2 俺は…アキレス。
男3 アキレスって、アキレスと亀の？
男2 ああ。ゼノンのパラドックスだ。
男3 なんだか辿り着ける気がしない名前だな。
女2 アキレスは永遠に亀を追い抜けないからね。

亀とアキレスが通り過ぎていく。

アキレス 追い抜けないー。(去る)
男2 いいんだよ！俺はパラドックスに逆らってやるんだよ！さてどうやって旅しようか。
女2 あのさ。
男2 なんだエマニュエル。
女2 もしここがパラドックスばかりの世の中ならさ。
男2 ああ。
女2 私たち、こうしてじっとしてるのが一番早く移動できる可能性があるよ。
男2 は？それはどんな方法なんだ。
女2 それはね、
声 366号。
男2 え？
声 366号。
男2 誰だ。
男2 誰だ、じゃない。私だ。

男2の姿は消え、男1になっている。
目の前に女4がいる。

男1 え。
女4 なにを独り言を言っているのだ。
男1 え、ここは…
女4 どうした、寒さでおかしくなったか。
男1 ここは…牢獄…？
女4 そうだ。お前はパラドックス法第74条第1項に引っかかったんだ。
男1 パラドックス法？

女4 いやいよいかれちまったか。まあこの寒さだ。ぶつぶつ言っていないで、毛布にくるまって寝ろ。

男1 あなたは：看守さんですか。

女4 なにをいままさら。初めて会ったみたいな顔して。

男1 俺はさっきまで、女と話していたんです。

女4 いい夢だな。女とよろしくやっていたとは。

男1 違います！パラドックスの向こう側から来たっていう女が、さっきまでここにいて…

女4 お前、法をおかしておきながら、まだパラドックスの話をするのか。

男1 法？俺は法をおかしたんですか！？

女4 そうだ。そんなことまで忘れちゃったのか。

男1 いや：なにがなんだか：

女4 いいか366号。お前はパラドックス法をやぶったんだ。

男1 そんな法律初めて聞くんですよ。

女4 とぼけるのもいい加減にしろよ。

男1 ほんとに知らないんです！

女4 うるさいやつだな。早く寝ろ。

女4、行こうとする。

男1 待つてください！俺はなにをしたんですか！

女4 お前は、世の中のパラドックスつまり逆説、あるいは矛盾と言った方がいいか。そのパラドックスを無くそうとした。それは大きな罪だ。

男1 待つてください！

女4 しつこいな。

男1 もしも俺が本当にそうしたとして、世の中の矛盾を無くそうとするのは、当たり前のことじゃありませんか。

女4 それが法に引っかけたんだよ。この世の中は矛盾を矛盾のままにしておかないと成り立たないんだよ。

男1 いつの間にそんな法律が出来たんですか！

女4 あんまりショックで頭でもおかしくなっちゃったか。いいか今から一年前そういう立派な法律が出来ただろうが。

男1 パラドックス法。

女4 そうだ。国連でも認められた立派な国際法だ。世界共通の法律だ。

男1 何故そんな法律が出来たんだ。

女4 一時期ニュースでしきりにやっていただろう。

男1

いや俺は…見てない。

女4

世界にはどうにも解決できないパラドックスが存在する。あつちを立てればこつちが立たず、見方によっては辻褄が合わなくなってしまふ。そういうパラドックスを掘り下げていくことにより、些末なことに時間をつかい、国会が回らなくなったり、法律の制定が遅くなったりしていたんだ。だから、国から「これはパラドックスである」と認められたことについては、それを解決しようとしないう、という協定が世界で結ばれ、各国がそれぞれの基準でパラドックス法というのを制定したんだ。

男1

なんだそれは。それじゃ国の思うつぼじゃないか。だから制定されたんだよ。すべては国民を管理するためだ。

女4

俺は何故そんなことを知らなかったんだ。

男1

知らないよ。お前まさか…タイムトラベラーか？

女4

え？

男1

いや、それなら知らないのも辻褄が合う。

女4

今、何年ですか。

男1

2044年だ。

女4

…2016年だろう。

男1

いや、2044年だ。

女4

嘘だろう。そんなの信じない。

男1

ま、お前がタイムトラベラーだとして、なにも知らないで法をおかしたとしても、裁かれるのに変わりはないさ。いいか。ここは独房ってわけじゃないんだ。うるさくしてないで、おとなしく寝ろ。

女4

女4、去る。

男1

…嘘だ。

声

信じられないのも無理はない。

男1

誰だ。

声

ここだ。

男1

どこだ。

声

隣だよ。お前の隣の牢屋だ。

男1

隣？じゃあんたも…

声

ああ、パラドックス法をおかした。

男1

どうなってるんだこれは。

声

私にも分からない。実は私も2016年からやってきた。

男1

そうなのか！

声 声がでかい。

男1 すまん。

声 お前、名前は…

男1 名前？俺は、亀山だ。

声 亀山、私は鶴岡だ。

男1 鶴と亀か。縁起はよさそうだな。

声 なんだ？

男1 いや。こっちの話だ。

女5が現れる。

女5 どっちの話だ。

男1 え！なんで！

女5 しっ！声がでかい。

男1 どうしてこっちに來れた！

女5 穴を掘ってたんだ。

男1 こっちにか。

女5 こっちだけじゃない。外に通じる穴も掘ってある。

女4の声 366号！なにをまたぶつぶつ言ってる！

男1 まずい！

男1、とっさに女5を背中に回して毛布をかぶる。

女4 おい、静かに寝ろ。

男1 分かってる。

女4 やけに聞き分けがいいな。

男1 なんだか呆然としちまってるな。本当に頭がいかれてるのかもしれない。

女4 可哀想だが、お前の罪は重い。もうすぐお上からお達しが来る。お前の処

分のお達しがない。

女4、去る。

男1 お上からのお達し。

女5 亀山、逃げよう。

男1 逃げる？

女5 私の掘った穴から外に出るんだ。

男1

どうして。

女5

言っただろう。私も2016年から来た。

男1

そんなことが可能なのか。

女5

2024年に可能になった。もちろん世間一般的にはまだ流布してないけどな。うるう年っていうのは、特別なことが起こるんだよ。

男1

その言葉どこかで…

女5

どうした？

男1

いや。いいんだ。それより、2024年に可能になったのに、どうして2

女5

016年のあんたが。

男1

2024年の私がある日突然現れて教えてくれた。

女5

タイムパラドックスは大丈夫なのか。

男1

映画の見過ぎだよ。そんなものは無いに等しい。

女5

そうなのか。しかし凄いな。タイムトラベルとは。

男1

あんたもおそらく似たようなもんだろ。

女5

似たような。

男1

さ、行こう。私もパラドックスを無くしたいんだ。

女5

あんたもか。

男1

ああ無くしたいんだ。私の矛盾を。

女5

あんたの矛盾。

男2たちになる。

男2

というビジョンがいきなり見えた。

女2

なにそれ。いきなり壮大じゃない？

男3

めっちゃ面白そう。続きが知りたい。

男2

あのな、これはドラマとか映画じゃないんだよ。

男3

いや、ドラマとか映画の可能性だってあるだろう。すべて不確かなんだから。

女2

どうしてそんなものが見えたのかな。

男2

分からない。あっちの俺も戸惑っているんだからな。

女2

でも今のだと、あっちのあなたは、パラドックス女とはぐれてしまったみたいね。

男2

はぐれたということと合ってるのかは分からないんだが。

女2

ま、いいわ。移動しましょう。

男2

どうやって。

女2

ゼノンのもうひとつの有名なパラドックスは知ってる？

男2 もうひとつ？

女2 飛んでいる矢は止まっている。

男3 飛んでいる矢が止まっているわけじゃないですか。

女2 矢を放つでしょ。

矢を放つ人が現れる。

矢を放つ人 矢を放ちます。

男3 さっきも思ったんだけどさ、この人たちどっから出てくるわけ。

矢を放つ人 放ちます。

矢を放つ人が、矢を放つ。

矢が飛んでいく。

女2 こうして矢が飛んでいくでしょう。

男3 うん。

女2 この矢をとつてもなく素早いシャッター速度でカメラに収めたとするですよ。

カメラマンが出てくる。

カメラマン 撮ります。

矢を放つ人 放ちます。

矢を放つ人が矢を放つ。

矢が飛んでいく。

カメラマンが凄い速さでシャッターを切る。

カメラマン 撮りました。

女2 そうすると出来上がった写真に矢が映るでしょ。

現像する人が現れる。

現像する人 現像しました！

男2 うつつてないじゃん。

女2 でもこのカメラマンのシャッター速度をもっともっと極限まで速くしてい

カメラマン
けば、いずれは矢が映るでしょ。
それで私はチャレンジしました。

矢を放つ。
カメラマンが物凄い速さでシャッターを切る。

カメラマン
現像する人
とうとう撮れました！
現像しました！

男2と男3・写真を見る。

男2・3
おおー！

カメラマンと現像する人と矢を放つ人が去る。

女2
男2
女2
男2
このように写真に写った矢は、止まっている時に写っている矢と変わらな
い様子で写ってるでしょ。
ま、確かに。
つまり凄い速さで飛んでいく物体も、一瞬一瞬を見れば止まってるに等し
い。

男2
つまり…このようにじっとしているということは、凄い速さで飛んでいる
ことに等しい。

女2
そういうこと。

男3
そんな屁理屈だろう。

女2
屁理屈とパラドックスは紙一重なの。そう教わったの。
教わった？

男3
ええ、大事な人にね。

女2
でもおかしいだろ！じっとしてるのが一番速いって
じっとして！

三人、じっとする。

男3
女2
…いつまで
しっ。

三人、じっとする。

女2 ……よし。けっこう進んだね。
男3 は？なに言ってるんだ。おい聞いたかアキレス。
男2 どうやらそのようだ。アルバート。
男3 ここどこなんだよ。
女2 ここは、砂漠だね。
男2 どうやらそのようだ。アルバート。
男3 え、そうなの！
男2 わ、砂が目にも！
女2 口に入った！ぺっ！ぺっ！
（サングラスをかける） どの砂漠でしょうね。ここは。

男1と女5。
穴を進んでいる。

男1 え。
女5 どうした亀山。
男1 もうひとりの俺が、砂漠に辿り着いた。
女5 なんだそれは。
男1 俺とは別の世界の、もうひとりの俺だよ。
女5 パラドックスだな。
男1 ああ。どっちが本当の俺なのか。
女5 そもそもそれはお前なのか？
男1 え？
女5 いや。

進む。

男1 なかなか狭いな。
女5 文句を言うんじゃない。あのいかれた看守の目を盗んで毎日ちよつとずつ掘ったんだ。
男1 鶴岡。感謝する。
女5 ……お前はどんなことで法をおかしたんだ。
男1 分からない。ただ、俺は無性にパラドックスを無くしたいと思ってる。
女5 私もそうだ。
男1 何故こんなに無くしたいと感じているのだろうか。

女5　なんかあったんじゃないか。
男1　なんか。

女5　私ははっきりしてるけどな。
男1　あんたはあんたの理由が分かるのか。
女5　当たり前だ。でなきゃこんな穴を死ぬ気で掘るわけがない。あ、見る。

男1　あれは、光か。
女5　出口だ。出口が見えてきた。

女3が後から追いかけてくる。

女3　そいつは嘘つきです。
男1　出た。

女3　女はみんな嘘つきです。だからそいつは嘘つきです。
女5　じゃあんたも嘘つきじゃない。

男1　もういい！そのパラドックスは忘れたい。
女3　嘘つき！

女5　あんたも嘘つきでしょ！
男1　もうそいつはいいから早く出口に行こう！

女3　嘘つき！
女5　嘘つき！

女3と女5のやり取りが続く。

男1　鶴岡すまん！先に行くぞ！

男1、一人で突き進む。
女3と女5は置いて行かれる。

男1　もうすぐだ…もうすぐ出口だ！

男1、出口に辿り着く。

男1　やった。

女6が立っている。

年女性の方が、金出してくれるし話聞いてくれるし俺をあがめたてまつつてくれるしもう最高だよ。

男2 お前、悪い奴だったんだな。

男3 悪いってなんだよ。悪いの定義を教えてもらいたいもんだ。

女7に切り替わる。

女7

…というビジョンが私に見えました。私はどうやら、ロクでもない男だったみたいですよ。私は今まで順風満帆な生活を送ってきました。なに不自由なく育ち、周りの人はみな、私に優しく、執事がアールグレイを淹れてくれて、窓からは手入れされた美しい庭の木々、小鳥がさえずり、音楽はそう、大好きなショパンの調べ。そんな生活を今まで送ってきたのです。ところが、私はあのようなロクでもない男だと分かってしまったのです。いや、どっちが本当の私かは分かりません。分からなく、なってしまうしました。

男4が紅茶を持って現れる。

男4

お嬢様。ひとりごとですか。

女7

ジョナサン。今のは聞かなかったことにしてちょうだい。

男4

承知いたしました。お嬢様、アールグレイでございます。

女7

その上に置いておいてちょうだい。そして、早く一人にしてちょうだい。

男4

承知いたしました。

男4が紅茶をテーブルに置こうとする。

女7

お待ちなさい。

男4

なんでございましょうか。

女7

お前、何故手が震えているのです。

男4

お嬢様、気のせいでございます。

男4、手を引っ込める。

女7

ごまかしても無駄よ。ごらんなさい。自分の手を。さてはジョナサン、お前、なにか隠していますね。

男4

お嬢様には隠し事はできませんね。

女7 そうよ、私は以前、パーティに呼ばれたお家の密室殺人事件を解決したことがあるのですからね。

男4 そうでしたね。お嬢様は名探偵でした。

女7 お嬢様は名探偵、ライトノベルみたいな言い回しね。気に入ったわ。さあ
ジョナサン、お前の隠していることを洗いざらいぶちまけておしまいなさい。

男4 実はお嬢様…さきほどのお話ですが…

女7 さきほどの？

男4 お嬢様が鏡に向かってぶつぶつ言っていた、さきほどの事実でございませう。

女7 まあお前、私の言葉を立ち聞きしていたと言うの？

男4 大変申し訳ございません。

女7 あれは私とお前だけの秘密よ。

男4 承知いたしました。

女7 それで？さっきのあれがどうしたと言うの？

男4 実はお嬢様、それは大きな愛によるものなのです。

女7 愛？ジョナサン、お前はなにを言っているの。

男4 その御方は、お嬢様のもう一人のご自分なのです。

女7 あんなクズ男が私だなんて、そんなことあるわけがないでしょう。

男4 いえ、お嬢様は気づいていらっしやらないのですが、お嬢様とそのクズ男
様は、一心同体であり、おそらく今この瞬間、磁石のS極とN極のように、
引き寄せあっているのです。

女7 何故お前にそんなことが分かるの。

男4 実はお嬢様、お嬢様が解決したつもりになっていたあの密室殺人事件は…、
私が解決したのでございます。

女7 まあジョナサン、お前は私より頭がいいとでも思っているの？

男4 はい。

女7 …まあいいわ。とにかく私は、あんな男が私だなんて到底許せません。ま
してや、あっちが本当の私だなんてことは、決してあってはならないのよ。

男2と男3。

男3 というビジョンだよ。
男2 なるほど。

男3 こっちだってあんな偉そうな女が俺なんて許せないけどな！おい聞いてん
のか！（空に向かって）
男2 新しいパターンだな。

新しい？

男3 俺が出ていない。

男3 そりゃあ、俺のビジョンだからね。

男2 うわ、また風だ。顔を守れ。砂が目に入る。

男3 また砂が口に入った！ぺっ！ぺっ！

男2 ここは本当の砂漠なんだな。

男3 本当の砂漠だろう。こんなに砂があるんだから。

男2 この砂漠を進めば、俺はパラドックスの向こう側に行けるのか。

男3 行けるだろう。天竺とオアシスってなんか似てるもん。

男2 ざっくりしてんなぁお前。あれ、なんだこれ。

男3 どうしたの。

男2 また新しいパターンだ。

男3 おい！どうしたんだよ！おーい！おーい！

男3 が遠ざかっていく。

男2 だけが残り、目の前に女3と女4が現れる。

女4 お前は何故ここにいる。

女3 それがね、私も分からなくて。

女4 お前はまだここにいるべき人間ではないだろう。

女3 そうなんですよ。

女4 早く自分の場所に帰れ。

女3 帰りたいんですよ。だけど行く末を見守らないと。

女4 なんの。

女3 ルビーのですよ。

女4 ルビーの？

女3 私はね、女って奴を信用してないんです。

女4 いつからだ。

女3 物心ついた時からですよ。まず母に、「ここで待ってたら迎えに来るからね」

女4 と言われました。もちろん、ずっと待ってても母は迎えに来ませんでした。

女4 そこからずっと。

女3 ええ、そこからずっとです。

女4 そんなあんたも女なのは、事実なんだがな。

女3 いえ、私は、女じゃないのかも、と思ってます。

女4 凄く逆説だな。

女3 私はルビーの行く末が心配なんです。ちゃんと渡るべきところに渡るのか。

途中で現れる女たちは、嘘つきの偽物じゃないか。看守さん、あなたも女ですよね。

ああそうだ。

女はね、嘘つきなんですよ。

じゃ私も女ではないのだろう。正直者だからな。

ルビーか…。

え？

あ。

お前は誰だ。

あ、いや、たまたまですよ。たまたまここにいて…

こっちへ来い。

ひいひい！

女4、男2を掴もうとするが、掴めない。

女4 あれ。おかしいな。あれ。

男2 そうか、ここは違う場所なのか。やーいやーい！バカ看守！殴れるもんなら殴ってみろ！

女4 雑魚が。

女4、ピストルを出す。

男2 マジ。

女4、ピストルを撃つ。

男1と女6。

男1 (はっと目を覚ます) なんだ今のは。

女6 あ、起きた？

男1 あれ、俺は…

女6 さつきはごめんね。気絶させちゃって。

男1 ここはどこだ。

女6 ここで一緒に暮らしてたじゃん。

男1 ここで？あんたと！？

女6 正確に言うと、ここに似たところね。ほら、これよく一緒にやったじゃん。

(折り紙を見せる)

男1 …折り紙？
女6 そうそう。あんた下手くそで笑ったよ。
男1 いや、あんたなんか知らない。
女6 じゃ、これは？

女6、大きな宝石のペンダントを出す。

男1 凄い宝石だな。
女6 ルビーだよ。
男1 ルビー。さっきの…
女6 え？
男1 いや、なんでもない。
女6 本物だよ。これ、あんたのだよ。
男1 俺の？
女6 ほら。(渡す)

男1、宝石を受け取る。

男1 こんな立派な宝石が、俺の？
女6 あんたが苦労して手に入れたんだろう。
男1 俺が？どこで。
女6 思い出せよ。あたしにそう教えてくれたじゃないか。血ヘドを吐くような
男1 思いで手に入れたって。
女6 …確かに俺の物のような気がしてきた。
男1 あんた、パラドックスの向こう側を目指してるんだろう。
女6 ああ。
男1 ってことは、あの女を探してるんだ。
女6 知ってるのか！
男1 もちろんよく知ってるさ。
女6 あの女を探してる。
男1 あの女は待ってるよ。パラドックスの向こう側で。
女6 待ってる！俺を待ってるのか！おい教えてくれ！
男1 私のこと思い出したらね。
女6 あんたのこと？
女6 これで鶴を上手く折れたらヒントあげてもいいよ。

と折り紙を渡す。

男1
：鶴。

女6
折れたら呼んでよ。また来るから。

女6、去る。

ケガを負った女5が現れる。

男1
鶴岡！

女5
あの女にやられた。

男1
女は嘘つきです！って言い続けてる奴か。

女5
気を付ける。あの女、そのルビーを狙ってる。

男1
狙ってる？

女5
さっき私ともみ合いの最中に、ルビーはどこだ！と叫んでいた。

男1
あの女、ルビーの行く末が気になると言っていた。

女5
どこでそんなこと聞いたんだ。

男1
さっき、もう一人の俺が目撃したのを、俺も見ていた。

女5
行く末が気になると言いながら、本当は狙ってるんだよ。

男1
そうなのか…。

女5
それには特別な力があるみたいだ。

男1
特別な…

女5
ちっ。いつものお人よし癖が出ちゃったな。

男1
鶴岡。

女5
私たち、利害は一致してるよな。

男1
パラドックスを無くす。

女5
ああ。だからしばらく協力してやるよ。希望が見いだせるまでな。

男1
ありがたい。

女5
こうやって進むごとにだんだん分かってきた。

男1
分かってきた？

女5
亀山。お前に言わなきゃいけないことがある。

男1
なんだ。

女5
お前、自分がパラドックス法で捕まっていると思ってるよな。

男1
ああ。俺はパラドックス法をおかしたんだろう。看守がそう言った。

女5
実はそれは、お前がそう思い込んでるだけなんだよ。

男1
俺が？なんで。

女5
それは私から言うより、お前が思い出した方がいい。

男2と男3。

男2
男3
男2

というビジョンだ。

：えーと。今、結構色々あったよね。

男2
男3
男3
男2
男3

ああ。もう一人の俺、つまり亀山はパラドックス法をおかしたと思いついでる。でも実はそうじゃない。ただパラドックスを無くすために、パラドックスの向こう側を指しているのに間違いはない。

男3
男2
男3

うーん、それはなんとなく分かったんだけど、さっきのピストルの話は。あれは良く分からない。いきなり見えたんだ。

男3
男2
男3

ルビーって高いんだよね。いくらくらいするのかな。

女7と男4。

女7
男4
女7

というビジョンです。

女7
男4

そうですか。

女7
男4
女7

ジョナサン、私はね、自分がどっちの自分か分からないなんて、許されないと思ってるの。

男4
女7

そう思います。

男4
女7
男4
女7

私はこのパラドックスを解消したいの。あの女のもとに行けばいいのかしら。

男4
女7

パラドックスの向こう側から来た女ですか。

女7
男4

ええ。お前なんでも知ってるのね。

女7
男4

頭いいんで。

女7
男4
女7

あの女の言うような世界があるなら、そこへ行かなければ。

男4
女7

その前に、あの男を探すべきかと。

女7
男4

あの男？

男4
女7

パラドックスを無くしたい男です。

女7
男4
女7

ああそれはもうひとりのわたしと共にいる男の、もうひとりの彼ね。

男4
女7

さようございます。

女7
男4

お前はそいつの正体を知っているの？

男4
女7
男4
女7

いえ詳しくは知りませんが、私のすさまじい推理力を使って考えるに、おそらく彼は救世主なのです。この世界の。

女7
男4

救世主？

男4
女7

ええ、彼がパラドックスの向こう側へ辿り着ければ、お嬢様の悩みも解消します。

女7

ではその彼に会って、手伝いましょう。

男4

それではタイムトラベルいたします。

女7

タイムトラベル？なぜ？

男4

あの男とはおそらく時間がずれているのです。

女7

けれどそんなこととして、もうひとりの私に会ってしまったら

男4

お嬢様、タイムパラドックスはございません。

女7

ジョナサン、いたような気がした人が突然いなくなることであるでしょう。

男4

う。あれって、タイムパラドックスのせいじゃないかと思うのよ。

女7

お嬢様、そのようなことはございません

男4

ジョナサンがそういうのなら、信じてあげてもいいけど。

女7

お嬢様、行きましょう。

男4

どうやって？

女7

じっとしているのが一番速度をあげることができるのですが、ただじっと

男4

しているだけでは、時の流れに従順なだけです。

女7

どうすればいいの。

男4

逆立ちしましょう。

女7

え？

男4

逆立ちです。

女7

…分かったわ。でも自立できないから押さえてちょうだい。

男4

かしこまりました。

女7、逆立ちする。

男4

しまった、同じタイミングで私も逆立ちをしなければ…

女7

ジョナサーーン！

男4

お嬢様ああああ！

男4に代わり、男3が手で押さえている。

男3

なんだよあんた、いきなり現れて…

女7

その声は…わたし。

男3

おい、もう手を放してもいいのか。

女7

顔を合わせてもなにも起こらないのでしょうか。

男3

まさか…あんた…俺？

女7

そのようです。

男2

え、この人がアルバート！？

女7

あなたは、私が探し出さなければならぬ男の、もうひとりの男。

男3・女7

おい、手が疲れたからおろすぞ。

男3

はっ。なぜだ。

女7

お分かりでしょう。

男3、女7から手を放す。

女7

私は、あなたなのですから。このクズが。

男3

俺がクズならお前もクズだ。

女7

構わないわよ、クズ。うつ。

男2

どうした。

女7

自分にクズと言ってるようで、心が痛むわ。

男3

あんた、どうしてここに来た。

女7

そんなこと聞かなくてもわかってるでしょう。

男3

聞いてみたかっただけだ。

男2

同じビジョンが見える…そうか、通じ合ってるのか。

男3

居所を教えてやってくれ。

男2

誰の？

男3・女7

あんた（あなた）のもう一人のあんた（あなた）。

女7

ここは何年なの。

男3

2016年だ。

女7

そんなはずはないでしょう。

男2

なんで。

女7

なぜなら私も2016年から来たからよ。そんな時代を飛び越えないタイムトラベルある？

あるな。時間が少しだけずれている場合だ。

どこをどうやったらちよつとの時間のずれでこいつになるんだよ。

そうよ。しかも性別だって違う。私は彼の生まれ変わりに違いないわ。

どうして。

前世で悪いことをしたから、私になってるわけ。

逆だろ。前世でお前みたいな能天気女だったから、俺に生まれ変わったんだ。

だ。

いや、どっちも2016年なんだ。生まれ変わりはないだろう。

じゃなんなのよこれは。

パラドックスだな。

まあいいわ。こうした矛盾もあの男がパラドックスの向こう側に辿り着け

女7

男2

女7

男2

男3

女7

男3

女7

男3

男2

女7

男2

女7

男3

女7

男3

女7

男2

男3

男2

男3

女7

男3

女7

男2

女7

男3

女7

女7

男3

男3

女7

男3
女7
ば解決するとジョナサンが言っていたわ。
ジョナサンはどこに行ったんだよ。
知らない。一人で逆立ち出来てたら、どこかに行ってると思うけど。

女1が現れる。

女1
もしかして、私をお探しですか。

全員
あ！パラドックス女！

女1
パラドックスの向こう側の話が聞こえたものですから。

男2
あんた、俺をそこに連れてってくれ。

女7
それともうひとりのこの方も。

女1
もうひとりのこの方とは、誰なんでしょうか。

男2
分かってるだろう？あの目つきの悪い男だよ！

女1
あの人はあなたではないでしょう。

男2
いいや、あいつは俺なんだ。俺にはあいつのビジョンが見えるわけだから。

女1
いえ、あれはあなたではありませんよ。

男2
じゃなんで見えるんだよ。

女1
そろそろいいですか。

男2
なんの話だ。

女1
そろそろ起きてもらいたいのです。

男2
誰に。

女1
あなたにですよ。

男2
俺に？

女1
ええ、あなたに。

はっとする男2。

電車に揺られている。

男2
え？

男3がビールとつまみを持ってくる。

男3
凄いよ。

男2
なにが。

男3
…この電車、車内販売充実してる。

男2
…ああ、そうなんだ。

男3

そうだよ。
だから向かってるんだったな。俺たち。

男3

そうだよ。

男2

お前そんな時にビールって！

男3

兄貴が言ったんだろ！まだ到着まで時間があるから、気分を落ち着けようって！

男2

あ、俺か！俺が言ったのか！

男3

ったくなんでも俺のせいにするんだもんな。

男2

お前は常識からずれたことをやらかしそうな男なんだよ。ちゃんと働いてんのか。

男3

ちゃんと食わせてもらってたよ。彼女に。

男2

母さんが泣くぞ。

男3

母さんも知ってるよ。

男2

しかし初めて見る景色だな。

男3

そりやそうだよ。初めて見るんだから。

男2

そうだな。

景色を見る。

男2

：なんでばあちゃんは、砂丘のある所に住もうと思ったんだろうな。

男3

じいちゃんが関係してるみたいけど。

男2

じいちゃんだって、こっちに血縁とかあるってわけじゃないだろう。

男3

そうなんだよな。それが謎なんだよ。

男2

やっぱり知らない土地は合わなかったのかな。ばあちゃん。

男3

母さんは向かってるんだよな。

男2

ああ、向かってるって言ってた。

男3

これ、ちよっとした旅だよな。

男2

お前、ばあちゃん心配じゃないのか。

男3

でも言っても80代だよ。いつ死んでもおかしくないだろ。

男2

ひどい奴だな。

男3

俺早く死にたい派だからさ。じいちゃんって何歳まで生きてたんだっけ。

男2

何歳だったかな。

男3

俺は会ったことないからさ。

男2

そうだったな。

男3

兄貴は会ったことあるんだっけ。

男2

会ったうちに入るのか分かんないな。

女1 砂漠を渡らなければ、連れてはいけませんよ。
男3 おい待てよ！

女1を掴もうとするが掴めない。
女1、去る。

男3 なんだあれ。
女7 ……そうか。そういうことか。
男3 どういうことだよ！はっ！そういうことか。
女7 あなたにも同じビジョンが見えたようね。
男2 あれが本当の世界なら…あの目つきの悪い男の世界も…偽物なのか。
男3 なんでもいいや。早く砂漠を渡ろうぜ。
女7・男3 じつとしましょう（じつとしよう）。
男2 そうだな。じつとしよう。砂漠を越えるんだ。

男1と女5。

男1 どうやらもうひとりの俺は、俺には見えない新たなもうひとつの世界を見
たようだ。
女5 新たな世界？亀山には見えないのか。
男1 ああ見えない。…それからあっちには、あの女らしき女も現れた。
女5 あの女？
男1 こっちの話だ。
女5 もっと急げ。
男1 どうして。
女5 急がなきゃいけないんだよ。
男1 だからどうして。
女5 時間が限られてるからだよ。
男1 え、そうなのか！
女5 ああ。時間がいつまでもあった試しはないだろう。
男1 そうだな。なあ、ここはどこだ。
女5 ここは、川だな。
男1 ずいぶんでかい川だな。
女5 三途の川だからな。
男1 え？

男2たち。

え!?

なんだよいきなり!

なんで三途の川なんだ。

三途の川?

男1たち。

これ、三途の川なのか。

そうだよ。これを渡らないとパラドックスの向こう側には近づけない。

ここは：どこなんだ。

刑務所から抜け出してきただろう。

その刑務所はどこにあるんだよ。

死後の世界一丁目88番地。

死後の世界!?俺死んでるのか!?

まだ思い出さないのか。

まだ?

お前が死んだのは、ずいぶん前の話だ。

ずいぶん前?今は2016年だろう?

ああ、だからそれよりずっと前の話だ。この川を渡り切ったら思い出すさ。

なにも分からない。ただ俺に分かるのはこれだけだ。この衝動。パラドッ

クスを無くしたい。

あんたはパラドックスを無くさなきゃいけない。

分かっている。それだけは分かっているんだ。だが俺はなんでそんなにパラド

ックスを無くしたいのか。いや、パラドックスの向こう側に行く前には、

パラドックスだらけの世の中から抜け出さなければならないという、あの

女の言葉を信じているわけなんだが。

言葉だよ。

言葉?

言葉は時として大きな矛盾をはらむ。

：言葉。

あんたは自分の言葉に矛盾を感じてるんだ。

自分の言葉に?どの、自分の言葉に?

思い出せ。ずっと昔だ。

ずっと昔。

男1

女5

男1

女5

男1

女5

男1

女5

男1

女5

男1

女5

男1

女5

男1

女5

男1

女5

男1

女5

男1

女5

男1

男3

男2

男3

男2

女5 お前がパラドックスを無くすのに必要なものはなんだ。
男1 ……なんだろう。
女5 よく考えろ。
男1 すまん。その前に鶴を折らせてくれ！
女5 ダメだ。飛び込むぞ。
男1 え、泳ぐの！
女5 当たり前だ！せーの！

バシャーーン！

男2たち。

男2 どうなってんだ。
女7 失礼ですけどそのビジョン、本当にあなたで間違いありませんか。
男2 ええ、だって俺だという感覚がありますから。
女7 私は、私がこの男だというのをまったく信じていません。なぜなら、絶対に嫌だからです。
男3 残念だけど、それじゃ根拠になってないよ。
女7 おだまりなさい。アキレスさん。
男2 はい。
女7 あなたは少なくともその男と同化しているのが嫌じゃない。だから同じだ
男2 と思えるのですね。
女7 いや、同じ俺なんですよ。
男2 違いますよ。あなたはその男のビジョンを見せられているのです。
女7 どうして。
男2 それがあの男のイシなのです。

再び電車。

男2 ……あ。
男3 すぐ寝るな。兄貴。
男2 寝てたのかな。
男3 寝てたっていうか、死んだみたいにしっとしてたよ。
男2 すまん。
男3 酔っぱらうほど飲んでないだろう。
男2 いま、どの辺りだ。
男3 なんか…川だよ。ほらでっかい橋わたってる。

男2 川？三途の？
男3 縁起でもない。ばあちゃん怒るよ。
男2 ばあちゃん…。

後ろの席の女の声。

後ろの女

嘘つき。

男2 え。

男3 またもめてる。

後ろの女 振り込むって言ったじゃん。

男3 どうやら男に騙されたっぽい。

男2 男に？女じゃなくて。

男3 なんで女なんだよ。

男2 あ、いや。

男3 さつきからたまにあの調子で電話してる。

男2 だからあんな夢を見るのか。

男3 あんな夢？

男2 女は嘘つきだっていう女が現れたり。

男3 ああ。あるなそういうの。

男2 じゃあの男も…

男1が泳いでいる。

男1 まだ着かないのか！

女5 三途の川は広いんだよ！

女4が後ろから泳いでくる。

女4 待てー！

女5 やばい。

男1 逃げよう。

女4 待て待て待てー！

必死に泳ぐ男1と女5。

追いかける女4。

女5 あんた、どうしても会いたいんだろう！

男1 会いたい？俺が誰に会いたいんだよ！

女5 お前の言ってたパラドックス女だよ。

男1 あいつはパラドックスの向こう側に住んでるだけだ。しかも会ってすぐに別れてしまった。あの女に思い入れがあるわけがないだろう！

女5 そんなこと分かるのか。

男1 え？

女5 あの女に思い入れがないなんてそんなこと分かるのか！

男1 だって会ってすぐだぞ！

女4 待って待ってーっ！

女5 あんたはどういうパラドックスを解消したいんだ！

男1 どういう？

女4 女4につかまりそうになる。

男1 俺は…

女4 よーしもう少しだ！

男1 「俺の方が長生きする」って！

女5 え？

男1 俺の方が長生きするって言ったのに、先に死んで悪かったなって！

砂漠の男2。

男2 えっ！？

電車の男2。

男2 えっ！？

まわりの客が振り返る。

男3 あ、すみません。

男2 …。

男3 どうしたんだよ。

男2 俺の方が長生きする？

男3 なんの話だよ。

男2 俺の方が長生きするって、誰が言ったんだ。

男3 ああ、じいちゃん。

男2 じいちゃん!?

男3 ばあちゃんにそうやって言ったって聞いたことある。まわりもそう思ってたらしいじゃん。じいちゃんの方が絶対長生きするだろうって。

男2 ああ：そんなこと母さんから聞いたような。

男3 俺はばあちゃんからよく聞いたよ。じいちゃんはあれだけ長生きするって言ったのに、全然長生きしなかった。じいちゃんはいっつも矛盾ばかりだつて。

男2 それだ！

男3 なんだよいきなり！

男2 俺のこれ、じいちゃんだ。

男3 は？

男2 俺にはじいちゃんが見えるんだよ！

男3 なにそれ！オカルト的な!?

男2 そうじゃない！俺の頭の中にじいちゃんが見えるんだ！いや違う、むしろ俺はじいちゃんとながつてるんだ！だから俺がじいちゃんなんだ！

男3 夢だろう。

男2 夢みたいだけど違うんだ。これは：これは今だ。今のじいちゃんだ。

男3 今のじいちゃんって、じいちゃん死んでるでしょ。

男2 だから、今死んでるじいちゃんが今俺の頭の中でばあちゃんところに向かつてんだよ今！

男3 兄貴：酔っぱらったのか！

男2 酔っぱらってない！じいちゃんはその世から今、必死にばあちゃんのところに向かつてるんだ！矛盾を解消するために！

砂漠の男2たち。

男2 そうだったのか。

男3 なにがそうだったのかだよ。

男2 アルバートお前どこまで知ってるんだっけ。

男3 亀山が三途の川を泳ぎながら、俺の方が長生きするって言ったところまでだよ。

男2 分かった。お嬢様。

女7 なんでしょう。

男2 タイムトラベルしたい。

女7 どこへです。

男2 俺…いや、亀山がいるところへ。

女7 それがね、私も来たくてここへ来たわけではないのですよ。もともとは私もその、亀山さんのいるところを目指してるわけですから。

女2が現れる。

女2 それならなんとかなるよ。

男2 エマニユエル！

女2 ごめんなさいね！ちよつと途中で疲れてしまつて。

男3 あんた歳いくつ？

女7 このクズ。

女2 知つてるでしょ。私の歳。

男3 え？なんで、知らない知らない。

男2 なんとかなるっていうのは？

女2 砂山のパラドックスをつかうのよ。

男2 なんですかそれは。

女2 ここで会話してることは、亀山さんにも伝わるんでしよう。

男2 ああ、つながってるからな。

女2 ここに砂山があるわね。

男2 ああ。

女2 ここから砂をいくつか取り除いてもこれは砂山でしょ。

男2 砂山だ。

女2 つまりどんどん取り除いて最後の一粒になっても砂山は砂山なの。

男3 それまた屁理屈じゃん。

女2 言つたでしょう。屁理屈とパラドックスは紙一重だつて。

男2 それで、どうしたら行けるんだ。

女2 行くんじゃない。引き寄せあうの。

男3 引き寄せあう！？

女2 亀山さんが、かつてここに来たことが合つて、この砂を持っていれば、そ

男2 れは可能なの。だってその砂も、砂山も砂なんだから。

男2 そんなもの持つてるかな。

男1と女5。

男1

不思議なもんだ。

女5 どうした。
男1 砂はここにある。(どぶら下げた小瓶を取り出す)
女5 なんのことだ。
男1 いや、向こうの俺の話だ。
女5 そしてやったな。無事に着いた。
男1 ここに着いたとたん、いろんなことを思い出してきた。
女5 私もだ。
男1 俺は、あいつに伝えなきゃいけないんだ。あいつを励まなきゃ。

女4が川から上がってくる。

女4 だが、年貢の納め時だな。
男1 看守さん。
女4 お前はもうすぐお上からのお達しで、成仏しなきゃならんのだ。
男1 成仏。
女4 パラドックス法なんてのは作り事だよ。フィクションだ。お前が勝手にそんなことを思っただけだ。
男1 俺が？どうしてそんなことを。
女4 それはその女に聞くんだな。実際にパラドックス法をおかしている、その女に。
男1 あそこは…あの刑務所は、成仏前のたまり場か。
女4 そうだ。正確には刑務所ではなく、成仏案内所だよ。死後の世界一丁目8番地は、成仏の順番待ちの死人であふれている。お前は、長いこと成仏を拒否していた。パラドックスを無くせなかった自分に未練があったのだ。パラドックス。

男1の記憶。

女1 もうすぐ夕飯にしますね。
男1 ああ。
女1 斜め向かいの中山さんの話、聞いた？
男1 中山さんってあの、庭でバラを育ててる。
女1 ええ。
男1 中山さんがどうした。
女1 旦那さんがお亡くなりになったそうよ。
男1 え。まだ若いだろう。

女1 なんでも戦争の後遺症だとかで。
男1 そうか…。

女1 嫌ね、終わってからもこんなことにずっと悩まされるなんて。

男1 ああ。そうだな。

女1 奥さん、一人のこされて辛いわね。

男1 …。

女1 あ、支度してきますね。

男1 なあ。江梨子。

女1 …なあに？

男1 俺は、お前より絶対に長生きするよ。

女1 ……はい。

男1 必ず約束する。

女1 …信じます。

男1たち。

男1 パラドックスだな。

女4 もう無理だ、あきらめろ。未練を絶て。

男1 ダメだダメだ。あいつは今、危ないんだ。だから俺が行ってやらなきゃ。

女4 俺が励ましてやらなきゃ。頼む見逃してくれ。

女4 いやそうは行かない。

女5 あんたにだって思ってる人がいただろう！生きてる時！

女4 お前は黙ってる。所詮お前は虚構の世界の人間に過ぎない。

男1 どういうことだ。

女4 鶴岡は、亀山、お前の奥さんの書いた小説の主人公だよ。

男1 小説の！？

男1の記憶。

女1が小説を見せる。

女1 あなた、読んでくれる？

男1 お、続き書いたのか。どこかの出版社に持って行ってみればいいのに。

女1 いや、あなたが読んでくれれば、私はそれで満足なの。

男1 鶴岡はどうなったかな。

女1 鶴岡はパラドックス法をおかして、牢獄に閉じ込められたところは読んでわね。

男1 ああそうだ。それで鶴岡はひそかに穴を掘り続けた。
女1 そうそう。

男1 そしてとうとう脱獄を執行する日がやってきた。鶴岡は思った。大丈夫だ。
きつと上手く行く。うるう年っていうのは、
特別なことが起こるんだ。

二人 女なのにとくましいよな。

女1 女だからたくましいのよ。

男1 続きが気になってたんだ。ありがとう。

女1 お茶入れますね。

赤ん坊の泣き声。

女1 あら、江麻がまた泣いている。

男1 江麻も読みたいんだよ。

女1 そうね、あの子、私のつくるお話が大好きなもの。

男1 意味わかってるのか。

女1 声の雰囲気でなんとなくわかるんですよ、赤ちゃんは耳がいいんだから。

女1、去る。

男1 ええと、鶴岡は…(と読む)

男1たち。

男1 そうか、あの『パラドックス・ジャーニー』の主人公だったか。

女5 ああ、そうだよ亀山。『パラドックス・ジャーニー』は、お前の体と一緒に棺の中に入った。

男1 そうか。だから俺はパラドックス法をおかしたことにしちまったのか。

女4 それだけ好きだったんだ。奥さんの小説が。

男1 そうか。あんたが鶴岡か。もっと俊敏そうな人を想像していた。

女5 余計なお世話だ。お前のポケットを見る。

男1、ポケットから文庫本の体裁になったものを取り出す。

男1 パラドックス・ジャーニー。

女5 お前の奥さんがちゃんと小説の形にして棺に入れた。あの世でも手軽に読

めるようになってな。

あいつ…

亀山、私も、彼女を励ましに行きたい。

行こう。

ダメだ。お前だけ特例を認めるわけには行かないんだよ。

女3が現れる。

女3 そのルビーは偽物です。

男1 あんたは誰だ。

女3 私を忘れたの？

男1 あんたなんか知らない！

女3 いい？あんたのルビーはそんな大きさじゃないよ。

男1 なに言ってるんだ。

女3 本物のルビーを探しな。

男1 本物のルビー？

女4 お前は余計なこと言ってるのであつちに帰れ。

女3 分かってますよ。

女4 さあ、戻るぞ。お前だけ野放しにするわけにはいかんだ。でないと私の

女3 身も危うい。

男1 看守さん、その前にひとつ鶴を折らせてくれないか。

女4 鶴？

男1 ああ。これで未練を絶ち切ることができるはずだ。

女4 …いいだろう。

男1、鶴を折る。

男1 あれ…こっからどうだっけ。

女5 それは…そこを折るんだよ。

男1 え？ああ…そうだった。

男1、鶴を折り終える。

男1 出来た。ちょっと不恰好だけど。

女6が現れる。

女6 よく折れたね。ヒントだよ。兄ちゃん。
男1 お前…そうか。お前…絹代か。
女6 そうだよ。マコトにいちちゃん。
女4 お前、確か死後の世界指名手配の…
女6 ばいばい！

女6、折り紙の玉のようなものを投げる。
ボワーンと音がする。

女4 うわ！なんだこれは！
女3 なにも見えない！
女6 行くよ！
男1 おい！もうひとりの俺！砂は持つてる！俺はそっちに行きたいんだ！

男2たち。

男2 ……というビジョンだ。
男3 ……
男2 おい！違うんだ！俺はあんたじゃない！俺はあんたの孫なんだ！じいちゃん！聞こえるか！
男3 俺思い出した。
男2 なんだ。
男3 俺あんたの弟だわ。
男2 ようやく分かってくれたか！弟よ！
男3 兄貴！
男2 弟！

男2と男3、抱きしめ合う。

男2 なんだろう。現実ではこんなに熱い兄弟関係じゃない気がする！
男3 固いこと言うな！兄弟だろ！
女7 私も抱きしめられてるようで、うげ！気持ち悪！
男3 固いこと言うな！お前が気持ち悪いなら、俺も気持ち悪い！（強く抱きしめ合う）
女7 だけどあなたが分かったので、私も分かったわ。あの男はあなたのおじい

さんで、今必死におばあさんのもとに向かっている。

男2　そしてあの折り紙女は絹代さんだった。

男3　絹代さん、ああ、じいちゃんの妹の。

男2　そうだ。じいちゃんより先に死んだ。

男3　ああ、ばあちゃんに絹代さんは折り紙得意だったって聞いたなあ。

女2　私は教わったわ。折り紙。

男2　エマニユエル：江麻：そうか。あんた母さんか。

女2　そうよ。

男3　そりゃ歳だわ。

女2　あんたいつまで女に食わせてもらってんの。

男3　いつまでも。

女7　クズが。

男3　クズって言ったヤツがクズなんですー。

女7・男3　クズって言ったヤツがクズって言ったヤツがクズなんですー。うっ。心が

痛い。

男2　お前ら大変だな。

女7　どうして私のような品のいい人間があなたと一緒になのかしら。

男3　俺だって知りたいよっていうかお前誰だ。

男2　母さん、俺はじいちゃんを助けない。

女2　もし、お父さん：つまりあなたのおじいちゃんの世界とわたしたちの世界がつながっているなら、砂を持って、お互いに逆立ちすれば、砂どうしが引き寄せあい、一緒になれるはず。

男1たち。

男1　砂を持って：逆立ち。

男1、小瓶を取り出す。

男1　これは：あいつとの旅行で手に入れた、砂丘の砂だ。

男2たち。

男2　砂漠：砂丘？

女2　そうよ。ここは鳥取砂丘よ。

男2　鳥取砂丘！？

女2 二人が新婚旅行で来たの。お母さんの希望だったみたい。小説の「砂の女」

が好きだとかで。

そうだったのか…。

よし、みんなで砂を持って逆立ちだ。

私は無理。

母さん、そんなこと言ったらじいちゃんに会えないよ。

あのね、わたしもう60だよ。

見えない！

わざとらしいけどありがとう。あのね、人にはできることとできないこと

があるから。

じゃ行ってくるよ。母さん。

なに。

母さん、そういえば理科の先生だったね。

もう定年退職したけどね。

じゃ行くよ。じいちゃん。

男1たち。

男1 ああ。

二組同時に。

男2 せーの。

みんな、砂を握って逆立ちする。

お嬢様をおさえる女2。

全員 うーわあああああー！

電車の男2。

男2 なんだこれは…なんなんだ…

兄貴。

男3 お前も応援しろ！今俺とかお前とかじいちゃんたちが必死にがんばってるんだ！

男3 は？

男2

頭ん中でだよ！

電話の女が振り返る。

男3

…すみません。兄貴怪しまれたって。

男2

なに言ってる！そんな場合じゃないんだ！

男3

兄貴の頭ん中をみんなが知れると思うなよ！

男2

ああ！分かってもらいたい！なんだこれは…今どこなんだ。

男3

どんだけ壮大な夢を見てるんだよ！

男2

違うんだよ！たぶんこれはホントなんだ！ホントに今起こってるんだ！

男3

あ、見ろよ！あの辺砂丘じゃね？

男2

どれ！ホントだ！

後ろの女

あのお。

男3

あ、すみません！

後ろの女

…いや、いいんですけど。

男3

ほら怒られた。

男2

お前がぶつぶつ言うからまったく見えなくなった。

男3

知らないよ！

男2

ああ、頭ん中の俺はじいちゃんに会えるんだろうか。じいちゃん、ばあち

男3

やんのところに行けるんだろうか。

男2

よく分かんないけどさ、じゃ頭の中の兄貴はなにしようとしてるわけ？

男3

それは…俺はなにしようとしてるんだ？

男1と女5、男2、男3、女7。

見つめ合う男1と男2。

男1

お前…。

男2

じいちゃん。

男1

お前…当麻か。

男2

そうだよ、じいちゃん。

男1

あの赤ん坊か。

男2

…はい。

男1・2

大きくなったな。そうか。つながってるのか。

男1

お前は…その弟か。

男3

そうです。

男1

すまん。顔を合わせないうちに死んじまって。

男3 いいんです。こうして会えたから。

男1 お前は…誰だ。

女7 知りません。でもこいつのせいで感動してます。

男3 あんたが鶴岡！

男3・女7 もっとアンジェリーナ・ジョリーみたいな想像してた！

女5 うるせーよ。

男1 絹代は。

女5 絹代さんは置いてきちゃった。

男1 そうか絹代は無理だったか。

女5 いや、私の足を押さえてくれたからね。

男1 お前と俺のビジョンは、どうしてつながったんだろうな。はっ。

男2 このためだよ。多分。

男1 ああ、このためか。

男3 おい！なんだよ！二人で通じ合っちゃってさ。

電車の男2たち。

男2 1980年。

男3 なんだよ。

男2 じいちゃんが死んだ年だよ。うるう年だった。

男3 あ、そういえば結婚したのもうるう年だって聞いた。

男2 お前ばあちゃんが好きな曲知ってるか。

男3 知らない。そんな話したことない。

男2 俺は知ってる。いや多分、俺だけが知ってるんだ。

男3 なんで？

男2 何年か前に、ばあちゃんに頼まれたんだよ。ねえ当麻。聞きたい曲がある

男3 んだけど、どうやったら聞ける？教えてくれるかな。

男3 どんな曲なんだよ。

男2 じいちゃんが死ぬ年の、ちよっと前に流行った曲だよ。

スマホから曲を流す。

『タイムトラベル』（歌 原田真二）が流れる。

男3 この歌がどうしたんだよ。

女1（イメージ）があらわれる。

女1 聞きたいんだけどね、どうやって聞いたらいいのか分からなくて。レコー
ドの扱い方くらいしか知らないもんだから。

男2 って。

男3 で？

男2 聞かせてやったよ。スマホでさ。

女1 ああ、そうそう。これこれ。

男2 って言っで喜んでたよ。

男3 どうして聞きたくなっただろう。

男2 分かんない。その頃からばあちゃん調子は悪くなってたから、その歌聞け
ば元気が出ると思ったんじゃないかな。あと…

女1 棺にね、入れられなかったの。

男1 なんで。

女1 歌を棺に入れる、なんていう考えがなかったからかしら。

男1 レコードとかさ。

女1 だって歌は歌でしょう。形じゃないからね。

男1 まあそうだけどさ。

女1 でも可哀想なことしたね。入れてあげれば良かった。あの世には、歌はあ
るのかね。

男3 …ばあちゃんっぼい。

男1と男2たち。

歌はまだ流れている。

男2 だから俺は…じいちゃんに届けたかったんだ。この歌を。

男1 ああ、おかげですっかり思い出した。1978年のヒット曲だ。タイトル
は…

男1・2 タイムトラベル。

男1 そうだ。あの頃はほとんど寝たきりになってたからな。あいつと旅行に出
かける夢ばかり見てたよ。思い出した。

男2 じいちゃん、一緒にばあちゃんのところに向かおう。

男1 それは無理だ。

男2 どうして。

男1 俺は誰だか分かってるだろう

男2 じいちゃんだろ。

男1 俺は亀山だ。

男2 だからなんだよ。俺だって亀山の血は引いて…

寄ろうとする。

男2 あれ。体が。

男3 兄貴…なんだこれ！

男1 いいか、お前はアキレスなんだ。ここは…ここはパラドックスの世の中だからな。

男2たち、風に吹かれて飛んでいく。

全員 うわああああああ！

静寂。

女5 離れちまったな。

男1 あいつはアキレスさ。俺には近づけない。

女5 いい孫じゃないか。

男1 俺の孫だからな。

女5 それに、江梨子さんの孫だ。

男1 ああ：頭ん中であの歌がまわってる。おかげでやり切れる気がしてきた。

女5 鶴岡、行こう。

女5 どっちだ。どっちが病院だ。

すさまじい風の音がして、逆立ちした女6が突然現れる。

女5が足を押さえる。

女5 え？

女6 あっちだよ。

男1 絹代！

女6
男1

(逆立ちをやめて) あっちが病院だよ！兄ちゃん！
…行くぞ！

走り出す男1たち。

吹き飛ばされた男2たち。

女2が立っている。

おかえり。

…あれ。

何故でしょう。近づこうとしたらはぐれてしまったみたいですね。

なんで？

パラドックスか。

パラドックス？

アキレスは亀を永遠に追い抜けない。

いや兄貴はアキレスでも、俺はアルバートなんだけどね。

女3が現れる。

女3

あのルビーは偽物なんだ！

男2

え？

女3

本物を持たせなきゃダメだ！

男2

なに言ってるんだよ！

女7

本物はどこにあるのですか！

女7

嘘つきとはしゃべりたくない！

女3

まあ、藪から棒に失礼な！

男3

あ、電話だ。

電車の男2たち。

男2

アルバート。

男3

違う違う、インシュタインだよ。俺のやってたバンド。確かにインシ

男2

ユタインの名前はアルバートだけどさ。

男3

え？ああ。なんだっけ。

男2

ロマンチック・インシュタイン。

男3

ああ。それよりスマホ。

男2

あ！（出る）もしもし。母さん？あ、着いた？え？…うん、あ、そうか。

男2 いや、もうすぐ着くと思う。…分かった。
なんだって？

男3 やばいかもって。そろそろ。

男2 じいちゃん間に合うかな。

男3 妄想のじいちゃんよりも俺たちだろう？

後ろの女 あの、さっきからちよいちよい耳に入ってくるんですけど。

男2 あ、すみません。黙ります。

後ろの女 それ、亀山さんですかね。

男2 え？ええ、うちは亀山ですけど。

後ろの女 やっぱり。実はね、これ、届けようと思って。

指輪の箱を取り出す。

男2 (受け取る) これ…ルビーですね。

後ろの女 実はね、うちの祖母が亀山さん、あ、おばあちゃんの方ですけど、その亀山さんと仲良かったみたいで、ずいぶん昔の話なんですけど亀山さん、なかなか生計が立てられなくてお金を工面しなきゃいけなくなったそうなんです。

男2 ええ。

後ろの女 それでどうしてもなにか売らなきゃいけないってなって、うちの祖母に相談したらいいんですけど、下手な質屋行くより、私に借りなさいって言って、それで、亀山さんとこは二人で相談して、婚約指輪をうちの祖母に預けてお金借りたんですよ。

男2 …そうだったんですか。

後ろの女 祖母はね、そんなもの預かれないって言ったんですけど、それじゃ信用問題にかかわるからって。いずれ返してもらえるように頑張るからって。そしたら亀山さんとこの旦那さんが早くにお亡くなりになって…祖母は指輪を返そうと思っいたらいいんですけど、いいからそのまま預かっててくれって言われたらしくて。

男2 そうか、あれはこれだったのか。

男3 あれはこれ？

後ろの女 だから私ね、返しに行くんですよ。祖母ももう立てなくてね、代わりに返してきてくれて。

男2 そのおばあちゃんは元気なんですわね。

後ろの女 元気は元気ですよ。

男2 嘘つきに敏感ですか。

後ろの女 ああ。昔おばあちゃんのお母さんに捨てられた経験があるんで、女に対し

て用心深いところがあります。

男2 やっぱり。

後ろの女 亀山さんのことはなぜか信用してたみたいですけど。

男2 そうですか…。

後ろの女 でも、こっちの方に旅行してみたかったし…いろいろあって一人になった
かったんで、ちょうど良かったんですけど。

男3 いろいろあってね。

後ろの女 は？

男3 ああ、いやいや。

男2 きれいなルビーだな。

後ろの女 死んだ旦那さんが、血を吐くような思いで手に入れたとかで。

男3 その割に借金まみれだったんだな。

男2 お前もその血を引いてるんだよ。

男3 はっ。

後ろの女 というわけで、すみませんが、途中までご一緒させてください。

男2 そうかこれだ…これが本物なんだ。

後ろの女 本物？

男2 どうしたらいいんだ。どうしたらこれをじいちゃんに届けることが出来る
んだ！

男3 なに言ってるんだよ。兄貴。

男2たち。

男2 というビジョンだから、これはどうしたものか。

女3 それです。そのルビーが本物です！

男3 なんとか取り寄せられないのか。こっちの世界に！

男2 母さん、なにか知らないのか。

女2 うーん。

走っている男1たち。

男1 あれが本物？どういうことだ。

女5 本物って？ルビーのことか。

男1 これは偽物なのか。ダメだ。本物を持って行かないや。あいつが元気になる
らない。

電車の男2たち。

男2 どうしたらいい。
男3 それをどうしたらいいんだ。
男2 これをじいちゃんに渡したい。
男3 頭ん中のじいちゃんに？そりゃ無理だろう！

男2たち。

女2 やれるとするなら、世界創造のパラドックスを使ってみるしかないわね。
男2 世界創造のパラドックス？
女2 世界そのものが曖昧だというパラドックスよ。
男2 世界そのものが曖昧。
女2 今見ている世界が全てこの通りの大きさだとは誰も証明できないでしょ。
男3 そんなことないだろう。世界はこの大きさだよ。
女2 それをきちんと証明できる？
男3 証明は：誰かが証明してくれるんじゃないか。誰か、頭のいい人が。
女7 バカが。
女2 世界そのものが曖昧である以上、今おじいちゃんたちがいる場所とその電車のあんたたちがいる場所はどこかでつながっているとと思うの。
男2 だけどつながってたとして、どうやって近づくんだよ。
女2 世界を圧縮するのよ。一瞬だけでも。
男2 そんなこと出来るのか。
女2 タイムトラベルできるんだもの。不可能じゃないと思う。
女2 そいつ女だけど信用できるのか。
女3 世の中嘘だらけなんだから、嘘を信用することではか前には進めないのよ。
男2 それでどうやって圧縮するんだ。
女2 私たち全員がじっとして、凄く速さで動いている間に、同じものを想像するのよ。
女7 私たち全員っていうのは、こことおじいさんの場所と電車。
女2 そう。
女3 同じものってどうやって想像するの。
女2 私たちが同じ想像ができるものを強く思い描くと、そこが世界の中心になって、そこに向けてぐっと世界が圧縮するのよ。
女3 同じ想像ができるものってなに。

男1たち、走りながら。

男1
あいつだ。

女5
え？

男1
あいつならみんな想像できる。

女6
江梨子さんだろ。

男1
そうだ！

女5
そうか！江梨子さんだ！

電車の男2たち。

男2
ばあちゃんだ。ばあちゃんを想像するんだ。

男3
ばあちゃんを？

男2
あなた、うちのばあちゃんを知ってますか。

女3
ごめんなさい。私は。

男2
お前は出来るよな。若い頃のばあちゃん。

男3
うん、それがなんだってんだよ。

男2
じっとして。目を閉じて。

男2たち。

男2
そうか。ばあちゃんの若い頃。パラドックス女。

女2
目を閉じて。想像するんです。

女7
パラドックスの向こう側から来た女。

男2
パラドックス女。

男3
パラドックス女

女3
パラドックス女。

男1たち、立ち止まって。

男1
江梨子を頭の中に。

女5
江梨子さんを…。

男2たち。

男2
よし、みんな。いっせーので強く想像しよう。
全員
いっせーの。

三つの世界が限りなく近づく。
(三つの世界が同時に舞台に存在する)

女2
いいわ。おばあちゃんの残像を中心に世界が圧縮してる！
男2
近い！近いぞ！今だ！電車の俺！
電車の男2
分かった！受け取れ！

電車の男2、男1に指輪を投げる。
男1、指輪をキャッチする。

男1
もらった！

世界が元に戻る。
男1たち。

男1
やった！

男2たち。

男2
やった！

電車の男2たち。

男2
やった！
男3
なんだ今の。
男2
お前にも見えたか！お前にも！
男3
ああ、あいつがいた。
男2
あいつ？あいつって誰だ。
男3
いや。いいんだ。

男1たち。

女5
よし！進むぞ亀山！

男1 おう！
女5 あれ。絹代さんは？
男1 いないな。
女5 戻ったのかもしれないな。
男1 ああ、行こう。

男1たち走り出す。

女5 砂の上は走りにくいな。
男1 新婚旅行で来たんだ。ここに。
女5 知ってるよ。
男1 砂丘の一番高いところにのぼって、二人で旗を立てた。土産物屋で買った棒にあいつのハンケチーフくくりつけて。
女5 知ってるよ。小説はその時に思いついたんだな。江梨子さん。
男1 そうだ。砂漠を女が逃げていく話だ。あいつは空想するのが好きだった。
女5 見ろ！あそこに大きな建物が見える！
男1 あれだ、あれが病院だ。きっと！
女5 走ろう。

電車にいた男2たちは、電車を降りて街中を歩いている。

(男1たちは走っている)

男2 よしもう少しだ！じいちゃん！
女3 全然よくわかんないけど！フレーフレー！おじいさん！
男2 ほらお前も応援しろよ！
男3 え？あ、うん。

砂漠を歩いている男2たち。

(男1は走っている)

男2 じいちゃんはやっぱり早いな。
女2 亀山だからね。あんた所詮アキレスだから。
男2 そうだな。俺はじいちゃんに追いつけない。
男3 …。
男2 どうした。アルバート。
男3 ん？いや、なんでも。

女7

へこたれたか。このクズが。

男3

うるさいよ。

女7

うるさいって言ったヤツがうるさいんですー。

…。

男1たち。

病院の前には女4が立っている。

女4

残念だったな。

男1

…。

女4

お前の妹は成仏した。先にな。兄の脱走を助けて満足したらしい。

男1

そうか。

女5

お願いだ、会わせてやってくれ。

女4

出来ないな。

女5

これで会わなければ未練は解消しない。

女4

そんなに簡単に今の世界の人間と会わせるわけには行かないんだよ。

女5

あんたは成仏しないのか。

女4

これが済んだらお役御免だ。晴れて成仏し、次に生まれ変わる。

男1

次？

女4

そうだ。この職業はな、上手く任務を遂行すれば、自分の希望するものに

男1

生まれ変わることが可能なんだ。

女4

それはなんだ。

男1

犬だ。人間なんか汚なすぎてもうまっぴらだからな。

男1

お願いだ。通してくれ。

駅から歩いている男2たち。

男2

通せよ！このバカ！

男3

兄貴、まわりの人見てるからさ。

男2たち。

男2

通せよ！このバカ！

女7

あれ。嘘つき女は？

女2

ルビーが渡せて満足したから元の所に戻ったんでしよう。意識だけがここに
来てたみたいだから。

男2

そっか。あれは電車の女のおばあちゃんか。

男1たち。

男1

通してくれ。

女4

お前ばかりずるいじゃないか。

男1

…。

女4

私にも未練がある。

男1

なんだ。

女4

私は数年前、不慮の事故で死んだ。

男1

そうなのか。

女4

ああ。可愛い一人娘がいた。その子の父親とは離婚していたし、ロクでもなかったので、あの子は親戚に引き取られた。私はあの子のことが忘れられず、こうして成仏案内所の務めをしながらも、いつもいつもあの子のことを考えている。

男1

…。

女4

あの子は今、一番犬が欲しいんだ。友だちになってくれる犬だ。可愛い小型犬だ。だから私は決めたんだ。この職務を誰よりもきちんとまっとうし、報酬を得るんだ。生まれ変わったら犬になれる報酬を。

男1

そうか。

女4

だからお前ばかりずるいじゃないか。お前ばかりが自分のしたいようにふるまい、生きている大切な人と会えるなんて。

男1

そうだな。

女4

だから私はお前を通すわけにはいかない。

男1

…鶴岡。

女5

なんだ。

男1

あきらめよう。

女5

お前いいのか！

男1

この人にだって人生がある。それを踏みにじるわけにはいかない。

女5

そんな…

女4

通すわけにはいかない。

男1

ああ。

女4

通すわけにはいかないが、ふとよそ見をしてしまった。

男1

え？

女4

よそ見をしてしまっている。

女4が遠くを見ている。

男1 大丈夫なのか。

女4 これまでの勤務態度は、100点満点だ。

男1 ……。

女4 一度ぐらいの減点なんかかなる。かもしれない。

男1 ……看守さん。

駅から歩いてる男2たち。

男2 看守さんめっちゃいいヤツ。

男3 なに泣いてんだよ。

男2たち。

男2 看守さんめっちゃいいヤツ。

男3 なに泣いてんだよ。

男1たち。

女4 ただし、会ったらすぐに連れて戻る。お上からはお達しが来てるんだ。
男1 分かった。

女4、去る。

女5 どうとうだな。

男1 ……ああ。

歩き出す男1。

歩き出す中で、色々なことが頭を駆け巡る。

やがて、病室。

歳を取った女1が横たわっている。

男1

江梨子。

女1

男1

女1

男1

女1

男1

女1

男1

女1

男1

女1

男1

女1

男1

女1

男1

女5

男1

女1

男1

女1

男1

女1

男1

女1

男1

女1

むくつと女1が起き上がる。

女1

男1

女1

男1

女1

男1

...

死ぬつもりはなかったんだ。

...

一人ぼっちにして悪かった。

...

おれは矛盾だらけの男だ。

...

お前になにもしてやれずに死んだ。借金ものこしたし、なにひとついいこ

とをしてない。

...

それをずっとずっと悔やんでいた。

...

でも誰よりお前を...

...

お前を...大事に思っているよ。

...

ほら、お前の書いた小説の主人公だ。

鶴岡だ。

俺の棺と一緒に入れてくれただろう。小説。

...

だからこうして今、ここにいます。

...

亀山からの鶴岡なんだよな。

...

俺のこと思って書いてくれたんだな。

...違いますよ。

え？

この主人公は、あなたの妹さんです。

え？

だって女でしょ。

ま、そうだけど。

あなたじゃないです。

マジかよ。

女1

…なんてね。

男1

え？

女1

意地悪したんですよ。

男1

おいおい。

女1

彼女はあなたです。妹さんのことも思ったけど。

男1

…。

女1

来てくれると思ってました。

男1

励ましたかったし、謝りたかったから。

女1

いいんですよ。私は幸せですよ。

男1

…。

女1

あなたに出会えて。

男1

そうか。

女1

行かないやならないんでしょう。

男1

ああ。

女1

ありがとうございます。

男1

…お前、まだ死なないか？

女1

さあ。

男1

元気になるか？

女1

さあ。

男1

元気になってくれ。

女1

元気になります。

男1

…。

女1

…って言っても、すぐ死ぬかもしれないですよ。

女4が現れる。

女4

もうそろそろ行くぞ。

男1

はい。

女1

…。

男1

どうしてここに住んだ。

女1

約束したでしょ。新婚旅行の時。

男1

…歳を取ったらこの辺に住みたいな。

女1

覚えてるじゃない。

男1

ああ。一緒に砂をこの瓶に入れた。

女1

ええ。丘の上で子どもみたいに旗を立てた、あの時にね。だからね、あなたがここに来るような気がして。

男1 ……来たぞ。
女1 ……やっぱりね。

ルビーの指輪を渡す男1。

女1 これ…
男1 お前のものだろう。
女1 ……ええ。
男1 これで元気になるか。
女1 ……元気になります。
男1 またな。
女1 ……またね。

男1、女4と去っていく。

女5 またな。とは言ってみたものの、鶴岡は自分の言葉がもう会えないという
女1 矛盾をはらんでいることを知っていた。
女5 それ、私の小説の最後の文章だ。
……またな。

女5、去る。

女1、横たわる。

しばらく、間。

女2がベッド横の椅子に座っている。

男2たちが駆けつける。

男2 ばあちゃん。
女2 大丈夫、眠ってる。穏やかな顔して。
男3 死んでないの？
女2 死んでるところか、生き生きしてるよ。
男2 間に合ったんだな。
男3 じいちゃん？
男2 ああ。じいちゃんは亀だからな。アキレスよりも早くて当然だ。

男3

男2

女2

男3

男2

男3

女2

男2

男3

男2

男3

男2

男3

男2

男3

男2

女3

男3

アキレス？

いやいいんだ。

(男3に) あんた。良かったの。

いいんだ。

なに。

…。

付き合ってた子がね、一週間前に亡くなったの。もともと病気でね。
え。

晩餐会ってバンドのボーカルやってただけどね。

晩餐会…もしかして…お嬢様。

お嬢様っぽいコスプレがコンセプトだったからさ。あのバンド。

そうか…それで。

一緒に向かってくれたのかな。じいちゃんみたいに。

…そうだよ。きつと。

俺のこといつもクズとかカスとか言ってる生意気な女だった。生意気で、

俺とそっくりだった。

…そうか。

でもね、晩餐会の執事のギターの子は、ホントに来てくれたわよ。

え？

執事の格好をした男4が花瓶を持って現れる。

男4

男3

男4

男3

男4

女2

あ、どうも。

お前。

お嬢様なら来たいとおっしゃるか。

お前。ありがとな。

いえいえ、あ、花瓶こちらに置いておきます。

ありがとうございます。あら？

女1の手に指輪が握られているのに気づく。

女2

女3

女2

女3

女2

これ。

それ、私の持ってきた指輪です！

え、じゃあ岡島さんとこの…

はい。

あ、どうもわざわざありがとうございます。でもこれ、いつの間に…

男2
男3
なんで指にはめてやらなかったかなあ。
肝心なところが抜けてるな。

ルビーの指輪を男2に差し出す女2。

女2
はめてやって。

男2
え、俺が。

女2
孫の方がいいって。

男2
…。

男2、女1の手を取り、指輪をはめる。

男2
ばあちゃん、笑ってるな。

男3
あ、そうだ。

男3、男4からギターを借りる。

女2
笑ってるよ。いい夢見てるんだよ。

男2
夢じゃないかもよ。

女2
え？

男2
今ばあちゃんが見てる方が現実かも。

女2
…そうだね。

砂が風に吹かれているような、そんな音がする。

(完)

台本の無断複製、使用は禁じられております。

本に関するお問い合わせ、または上演希望は次まで必ずご連絡ください。

090・8075・0683 劇団あおきりみかん

mail@aokirimikan.com